

## 中村地平における「外地」／「内地」の表象 —「旅さきにて」「土龍どんもぼっくり」を中心に—

申 福 貞

### はじめに

台湾の風土の明るさを基調とした「熱帯柳の種子」(『作品』1932.1)で文壇に登場した中村地平は、1934年5月に台湾と九州での旅を題材とした「旅さきにて」(『行動』)を発表する。「旅さきにて」はその後「土龍どんもぼっくり」(『日本浪曼派』1937.5)とともに単行本の『旅さきにて』(1937.12)に収められ、版画荘から出版される。河原功は戦時下における中村地平の文学活動を三つの段階に分け、その作品の多くは明るく牧歌的な「南方」の風土の中に設定され、生まれ育った宮崎の風土の影響と高等学校時代の台湾での経験が、戦時下の中村地平の作品の原風景をなしていると指摘している<sup>1)</sup>。同じ時期に書かれた作品の中には、「内地」の「南方」(九州や宮崎)を舞台とした作品も、「外地」の台湾を舞台とした作品もあり、また、「内地」と「外地」の風景が一つの作品の中に見出されたものもある。「内地」と「外地」が文学創作の「場」として描かれ、このような「内地」と「外地」を往還する姿勢は、新風土記叢書として出版された『日向』にも見られる。個人的な「癒し」の場として「南方」が存在し、それは中村地平の「南方」への憧れの内在的な源であると言われているが<sup>2)</sup>、「南方」を文学の創作の「場」として執筆活動を続けていた中村地平は、「内地」と「外地」を往還しながら何を語ろうとしていたのか。本論では、『旅さきにて』に収められている、旅先で出会ったお俊さんの薄幸を語った「旅さきにて」と、「南方の文学」の傾向をもっている「土龍どんもぼっくり」両作品を通じて<sup>3)</sup>、中村地平の「外地」から「内地」へ、さらに「内地」の南への視点の動きを踏まえながら、「外地」と「内地」の表象について考えたい。

### 1. 「旅さきにて」—「外地」／「内地」風景の変容

〈この紫陽花が根に女寝ねたり。紫陽花が如き女寝ねたり。こういう墓碑銘でも書くかな〉。一人の女の死を予告するようなこの一句から始まる「旅さきにて」は、旅先で出会った薄幸のお俊さんを、「僕」の旅の記憶をたどりながら回想する物語である。

#### ①紫陽花が語るもの

台湾の高等学校に通っていた「僕」は、故郷の友人である牧と無銭旅行の一夜を過ごすために、お俊さんが勤めている延岡小学校を訪ねる。学校に泊れなくなった「僕」たちを、お俊さんは旅籠屋に案内し、旅籠料まで出してくれる。夕方大輪の紫陽花の真岡浴衣の姿で現れた、お俊さんの浴衣の爽やかな糊の匂いに包まれながら、「僕」たちは窓を越えて見える対岸の水に映った飾燈を見たり、絃歌の響きを運びながら流れて行く舟を眺めたりする。

物語の前半部分は九州の自然に対する描写が多く、〈袴の裾を活発にさば〉きながら、〈快活な声〉

で「僕」たちに話しかける明るいお俊さんの姿が描かれている。九州の美しい自然を背景に描きだされたお俊さんの純粹無垢の姿は、汚れなき純潔の美しさをもつ「熱帯柳の種子」のアチャを連想させる。佐藤春夫に認められ出世作となった「熱帯柳の種子」は、中村地平の「南方」への憧れを示す作品として評価されているが、この「旅さきにて」では九州の自然や人情を通じて描き出されている。

「僕」が二度目にお俊さんに会ったのは植民地台湾である。お俊さんと別れたその年の秋遅く「僕」は、東門市場でお俊さんらしき人を目にするが、声をかけるのを躊躇する。「僕」がお俊さんらしき人を見たのは台湾料理の脂臭い匂い、人形芝居の銅鑼の音や、本島人の意味のわからない叫び声が響く市場であった。台湾に渡ってからしばらく経った「僕」であったが、未だ台湾の町に慣れない感じである。明治から当時の台湾にいる日本人の便宜を図るために西門市場等いくつかの市場が開場されているが、東門市場で「僕」が最近の渡台者と見られるお俊さん夫婦を目にしたのは不思議なことではないだろう。テキストの前半では絃歌の響きを選びながら流れていく五ヵ瀬川の夜の風景が描かれている一方、後半の冒頭部分には人が溢れている近代都会の夜の風景が描かれている。「内地」の夜の賑やかな絃歌が美しい旋律の響きを連想させるものであるとするならば、意味のわからない本島人の声の中で鳴り響く銅鑼の音は騒音の如きものとして描かれている。脂臭い匂いが漂い、意味のわからない叫び声が響くこの東門市場の描写は、浪漫を思わせる九州の風景と対照的に描かれている一方、〈土人〉ばかりの町で異国の生活に馴れることのできなかった後のお俊さんの生活を暗示させるようなものでもある。

冬休みに故郷へ帰ることをやめ、台湾の東海岸を旅行していた「僕」は、阿里登山列車から降りて、台南行きの汽車を待っている間に、嘉義街に住んでいるお俊さんを訪ねる。「僕」が乗っていた阿里登山列車は1907年に開通された鉄道で、後に観光にも利用されるようになっていたものである<sup>4)</sup>。日本の神社建築等に使用していた巨木等は、この鉄道を用いて運びだされているものも多いと言われている。1906年嘉義には大震災が起き、総督府は嘉義の新生に力を入れた<sup>5)</sup>。また、嘉義はペスト病などの流行が多く、衛生事業が重視されていた地域で、伝染病の防止のため日本人医師が現地に派遣されたりした<sup>6)</sup>。嘉義街は1901年から1920年まで嘉義庁所在地として周辺街庁を統轄し、当時街としては最多の人口を誇っていたが、1920年地方制度改正により台南州に組み込まれることに反対して、嘉義を独立した州として認めてほしいという置州運動が始まる。その運動の実行委員は地元の人と日本人で構成されて、置州運動と地元振興策が活発に展開された嘉義街では、地方制度改正の年以來着実に日本人が増えていた<sup>7)</sup>。お俊さんの台湾での定着地が嘉義に設定されているのは、当時の阿里鉄道建設と震災後の嘉義の再建とかわりがあるものと考えられる。

爽やかに晴れた日の午後、「僕」は住所を頼りに、お俊さんの家がある通りをたずねるが、本島人の家屋ばかり並んでいるその通りは、煤煙に包まれ、まるで黄昏時のように薄暗い。「僕」は、〈土人町特有のむっとするような異臭に顔を毀われ〉ながら、薄暗い町の中を歩き廻る。

僕が通りを歩いていると、泥で羽毛をよごしている家鴨<sup>あひる</sup>の群が、よたよたと僕の前を横ぎって、道わきを流れている溝のなかへ駆けこんで、ギャアギャア騒ぎ立て、汚水をはねかえした。通りには胡弓<sup>こきゅう</sup>の音が流れていて、アー、アー、アーとなにか悲痛な響をもった唄声が、その音にまつわって聞えてきた。その町はそこへ足を踏み入れただけで、変に不安な、孤独な気持ちに、人を駈<sup>かが</sup>りたてずにはおかれないような、響と匂いと、色合いとをもっていた。道傍の土壁の裾に屈み、

水管で煙草を吸っている老人や、通りで賭博をしている総角<sup>あけまき</sup>の子供の群や、窓から顔を出している老婆などに怪訝<sup>けげん</sup>そうに見送られながら、僕は住所メモと引き比べに、その通りにある土人家屋の表札を一軒ごとに覗いて行った。

「熱帯柳の種子」の〈しょぼしょぼした眼で僕達の方を名残りおしそうにながめ、嘴をよせあつていない〉ていた生蕃家鴨の子は、〈ギアギア騒ぎ立て、汚水をはねかえし〉ながら溝のなかへ駆け込む家鴨と変わっており、岸辺で洗濯しながら合唱する査媒人（いわゆる〈土人娘〉）の唄声は、悲痛な唄声に変わって胡弓の音と流れ響く。「熱帯柳の種子」で描かれていた純粹無垢なアチャの姿はすっかり消え、「僕」の目に入ったのは、通りで賭博をしている総角の子供や、暇そうに水管で煙草を吸っている老人、怪訝<sup>けげん</sup>そうな老婆の顔であった。阿片を連想させる水管で煙草を吸う老人の姿や賭博をする子供の様子は、生き生きとした人間の生活が感じとれる場面ではあるものの、近代化とかけ離れたところの陰影におびた植民地台湾の風景が描き出されている部分でもある。テキストの前半の浪漫を感じさせる九州の美しい自然の風景は見られなくなり、「僕」が目にしたのは、ただ〈変に不安な、孤独な気持ちに、人を駈りたてずにいられないような〉植民地台湾の風景である。「僕」が感じていた孤独と不安は、日本を離れ、一人で異国の人々の生活の只中に入り込んだが故の不安でもあるが、それは後のお俊さんの境遇と響き合うものである。

思いがけない住まいに漸く「川田齒科病院」という看板を掲げた〈土人〉家屋を発見し、お俊さんと会った「僕」は、本島人ばかりの薄暗い〈土人〉町で苦勞していたお俊さんの話を聞かせてもらう。初めての異国の生活に涙を見せていたお俊さんだったが、〈野菜やいろんなものを持ってきてく〉れる患者の〈土人〉の優しさに心がほぐれてきたか、〈こんなに台湾風になっている〉と言いながら、〈もう、南洋へでも、どこへでも一緒について参りますわ〉と川田さんの方を見て笑う。夫の方を見ながら語るお俊さんのこの言葉は、堂々と〈海外雄飛の思想〉を語っていた夫を意識して言ったかもしれないし、このような異郷の生活を自分の運命だと思って言ったかもしれない。台湾の生活に慣れている様子を見せているものの、別れる時にお俊さんはまた〈眼頭に涙をためてい〉る<sup>8)</sup>。ここで描かれたお俊さんの涙は、これからも夫について南洋でも出掛けないといけな未来への不安からくるものである。お俊さんと別れた半年後、「僕」はお俊さんの夫から彼女の死を知らされる。

僕の小さな物語は、ここで一応<sup>ましま</sup>の纏りをつけて差支えがないような気がするが、しかし、事實は更に哀しい結末に終わったのである。それから半歳ばかりたった夏の初め、台北の学校にいた僕は、川田さんの名前でお俊さんの死亡通知を受けとった。お俊さんはマラリヤの熱病でなくなつて、嘉義の土地に葬られたというのである。紫陽花ならぬ仏僧花<sup>ぶつそうげ</sup>の真赤な根の下に、今はお俊さんは小さな骨の姿で寝ているであろう。

〈僕の小さな物語は、ここで一応の纏まりをつけて差支えがないような気がする〉のであったが、「僕」はあえてあの世に「旅」立ったお俊さんの死をもって、「僕」の旅の物語の幕を閉じている。「僕」がお俊さんの死に紫陽花を思い出したのは、初めてお俊さんに会った時の、大輪の紫陽花模様の真岡浴衣を着ていた活発なお俊さんの姿が、記憶に残されていたからであろう。紫陽花は日向国の明るく元気で快活なお俊さんの象徴でもあり、いつまでもその姿でいてほしかった「僕」の願いでも

ある。五ヵ瀬川にまたがった風景の美しい城下町を活発に歩いていたお俊さんであったが、台湾でマラリヤの熱病にかかり、植民地の薄暗い〈土人〉町で、死という不運に遭い、短い人生を終える。お俊さんのはかない運命の背後には、〈海外雄飛〉の植民地移民政策により故郷を離れ、異郷で暮らす「内地人」の生活断面が描かれているのである。

## ②〈海外雄飛〉の先駆者川田さん

「僕」と故郷の話や牧の噂などをしていたお俊さんは、自分の主人を「僕」に紹介する。お俊さんが声をかけると、〈襖の向こうで人が蒲団から起きる気配〉がして、〈丹前をだらしなく着流した〉お俊さんの夫の姿が「僕」の前に現れる。いかにも暇そうな格好で、仕事への緊張感が見られない様子であったが、それまでの「僕」達の話聞いていたか、病院が忙しいもので、「僕」と同行する暇がないと残念そうに「僕」に向かって話しかける。病院が忙しいといっているものの、診療室に並べられている椅子や歯の模型などは申しわけ程度であった。川田さんと話しているうちに「僕」は、川田さんが歯医者でありながら、前歯が二本欠けていることに気が付き、〈心の寒くなるような旅愁〉を感じる。それは歯医者でありながら〈抜けた歯をそのまま放っておく物臭さに驚いた〉ことよりも、川田さんの何とはなしに惨めな雰囲気から感じるものであった。

〈日本人には海外雄飛の思想が欠けていていけません。私なんか南支にでも南洋でも、どしどし出かけるつもりでいるんです。<sup>99</sup> 只、然し、あれが可哀想でしてね）。初めての移住生活に涙を見せていたお俊さんと違って、夫の川田さんは辺鄙で薄暗い〈土人〉町での生活を苦勞ともせず、堂々と〈海外雄飛の思想〉を語り始める。〈血の異った人達の異臭の匂い〉を漂わせる町で、〈海外雄飛〉と南進の夢を語る川田さんを、「僕」は〈なじめない種類の人〉と思いながら、お俊さんの結婚に心ひそかに哀れを感じる。〈海外雄飛の思想〉を語る川田さんが、台湾に留まることなく、南支南洋にも出かけてみようとするその発言の背後には、日清戦争以来、台湾を南進基地と位置付けようとする認識が<sup>99</sup>、1930年代の日本において再び登場していた、台湾の地政学的地位と経済的効果をめぐる当時の動きが見てとれる<sup>100</sup>。

お俊さんの一家が住んでいるのは、「内地人」の居留地とかけ離れ、本島人家屋ばかり並んでいる薄暗い町で、「内地人」居留地の人々と対照的な存在として描かれている。植民地の治安上の問題、衛生上の問題が在外居留地の形成の一つの要因にもなっていた。あえて言うならばお俊さんがマラリヤにかかって死んだのも、そういう「安全」居留地を離れて住んでいたことの影響を表すものであると考えられる。しかし、新聞では、いわゆる「危険」な〈土人〉町で開業している川田さんを〈仁術の不言実行者〉として取り上げている。

〈えー、おかげさまで、私の病院も、大変評判がよろしい。郷里へお帰りになる機会があったら、一つ御吹聴下さい〉／川田さんは両手で子供をあやしながら、起ちあがると、押入れの中から、古新聞紙を取り出して、僕の前にひろげた。／〈近頃、こういう記事がでました〉／押しすめられて、僕はその古くなって茶ばい色をしている、菊倍版の新聞紙を取りあげた。／一門前市をなす川田歯科病院。院長は仁術の不言実行者、川田誠氏

「僕」がお俊さんの家に座っている間ただ一人の患者も訪ねてこなかったが、お俊さんの夫は、〈海外雄飛〉の思想の持ち主らしく、「内地」への感謝の気持ちと評判のいい病院の様子を、「内地」に伝

えるよう「僕」に頼む。中国居留地の日本人職業別人口構成に注目して取り上げられている資料に示された医者項目欄には主に獣医・歯科医であると記録されている<sup>11)</sup>。日清戦争以後政府の計画的な移民政策の下で植民地への日本人の進出人口が確実に増え、植民地では日本人の「自治的組織」が形成される。政府では居留地への進出の便宜をはかり、また在留の条件を整える方策の一環として「居留民団法」等を制定し、そこには在外医療団体同人会への補助金支給も決定されている<sup>12)</sup>。川田さんの「おかげさま」という言葉は、「僕」に対しての礼儀上の言葉であると同時に、このような国の「恩恵」を示す言葉でもある。川田さんは病院の繁盛を僕に確かめさせようと、〈古くなって茶ばい色をしている〉古新聞を押入れから取りだし、〈近頃、こういう記事がでました〉と、まるで最近のことのように語る。しかし、「僕」の目に入ったその〈近頃〉の記事とは、〈一見、広告記事であることの明瞭な六号記事に過ぎない〉もので、それを「僕」に見せながら〈会心そうに笑う〉川田さんに「僕」は〈妙に暗い寂しい気持ち〉を感じる。それは、〈門前市をなす川田歯科病院〉という広告と「僕」がいる間一人の患者の姿も見られなかった病院の様子とはあまりにも対照的で、その環境の中で夫を支えなければならぬお俊さんの境遇に哀れを感じていたからであった。

〈院長は仁術の不言実行者、川田誠氏〉。お俊さんの夫は自分の医術と人格を高く評価する〈仁術の不言実行者〉という広告に心から満足し、懸命に新聞記事の通り勤めようとする。〈海外雄飛〉、〈不言実行〉とはまさに戦時下の移民政策の一環として行われたものであり、川田さんは植民地政策に積極的に呼応しようとする人たちの典型として作り出された人物像である。〈海外雄飛〉を語る川田さんが〈なじめない種類の人〉と思っていた「僕」であったが、お俊さんが独り言のようにつぶやいていたあの「善い人ですわ」といった言葉のとおり、〈子供じみたものを平気で他人に見せびらかす川田さんの素朴な善良さ〉に気づくと、だんだん心がひかれ始めていく。〈不言実行者〉である川田さんに感じる〈素朴な善良〉は、まさに〈海外雄飛〉の夢を膨らませ、「開拓者」として植民地に派遣された庶民たちの〈素朴さ〉である。川田さんが語る〈海外雄飛〉とはあくまでも個人的な理想を語るもので、植民地政策に結び付けられた〈海外雄飛〉の本質とは距離があるものとみられる。このような意味で川田さんは、一見、国策を信じそれに気付かないままひたすら勤めていた〈素朴な善良〉な「開拓者」を象徴する人物に見えながら、現実と理想がかけ離れた〈海外雄飛〉の空虚さを体験した人物像として描かれている。一方、前歯が二本欠けているという川田さんに対する描写は、植民地への移民たちの一つの傾向をあらわしているものでもある。植民地への人口の流れは、「内地」の下層の人々が多かったが、歯医者である川田さんは下層とは言い難いものの、川田さんの「外地」への進出は、「内地」の業界での動きを想像させるものでもある。川田さんの「外地」への進出は、「内地」での不況をあらわすものであり、台湾を離れ、さらに南支南洋に出掛けようとするのは、台湾の「内地人」の世界からも、台湾人からも脱落しかかっている状況を示すものである。「内地」の現状の行き詰まりが、国民を「外地」へ押しやるものであることを示すものとして川田さんを描き、それが〈海外雄飛〉の内実であることを、中村地平は「僕」の目にうつった〈海外雄飛〉を語る川田さんの様子を通じて語っているのである。

「旅さきにて」は、「僕」の旅の記憶をたどりながら、今はもはや記憶の中でしか会えないお俊さんの短い人生を、九州と植民地台湾を舞台としながら描いている。テキストの前半には、九州の美しい自然の中で描かれた「僕」のお俊さんへの慕情とお俊さんの浪漫が、「僕」たちの「青春物語」として書かれている。後半には植民地台湾で会ったお俊さんの不運な結婚生活と、マラリヤの熱病という

「自然災害」に見舞われ、命まで亡くしたお俊さんの運命が語られている。「熱帯柳の種子」が発表された時期から「旅さきにて」まで、中村地平は「鯨の Copulation」(『四人』創刊号、1932)「廃港淡水」(『四人』2、1932)「蜚」(『作品』1932.7)「南海の紀」(『四人』5、1933)「きつつき」(『作品』1933.9)などいくつかの台湾と「内地」を舞台とした小説を発表するが、これらの作品の殆んどはいずれも台湾と「内地」を、二者択一で交互に背景としている。「旅さきにて」の一つの作品の中に中村地平は、台湾と「内地」という二つの場を設定し、浪漫から絶望に向かっている一人の女の短い人生を描くことによって、台湾の人々と移民たちの生活断片の風景を浮かびあがらせていた。中村地平の〈海外雄飛〉への違和感が、「内地」から「外地」へ移動する越境者たちの生活断面を垣間見ることによって示されているのである。

「熱帯柳の種子」の純粹無垢なアチャを描くことによって示された「南方」(植民地台湾)への憧れは、「旅さきにて」では見られなくなり、悲慘な「外地」によって美しい「内地」が強調されている。中村地平の植民地台湾に抱いていた青春の浪漫はだんだん薄れ、「外地」に向けていた視線は、「内地」の「南方」に向け始めている。「旅さきにて」に見られる「南方」(九州)への憧れは、後の「南方的文学」、「郷土文学」と言われる「土龍どんもぼっくり」や「南方郵便」につながるものでもある。

## 2. 「土龍どんもぼっくり」— 「内地」のなかの「外地」

1937年5月に『日本浪漫派』に発表された「土龍どんもぼっくり」は、第五回芥川賞の候補作となった作品である。九州を舞台とし、樵夫である伝吉と奉公人だった稲との日常生活を描いた作品である。〈素朴な性格に生まれついた〉伝吉は、〈都会人への強い憧憬〉をもっている稲と結婚するが、稲は初対面から伝吉を軽蔑し、人手不足で雇った源さんと不倫関係をもち、花子を出産する。自分の子供が生まれたことを知った源さんは消息を断ち、稲は異性とのつながりに自分の不幸せを嘆き、伝吉との日常生活に戻る。

### ①よみがえる過去の記憶

テキストの冒頭部分には、樵夫の伝吉が古めかしい商人宿で新嫁を待っている場面から始まり、伝吉の出自が語られている。伝吉は母親と二人で炭を焼きながら暮らしていたが、十八歳の時に母親を亡くし、隣の山の長作爺さんから初めて自分の出自にまつわる秘密を知らされる。生まれてから母親との二人生活に慣れ切った伝吉は、母親の秘密な半生にも自分の運命にも無関心な表情を見せ、父親のことにも関心をよせなかった。定住していた山を捨てて樵夫となった伝吉は、初秋のある日長作爺さんと川越の旦那に挨拶に行くが、その時の伝吉についての描写は、いわゆる「世間の常識」との落差を強調するものでもある。額の汗を拭きながら旦那の御機嫌をうかがう〈恐縮し切っ〉た長作爺さんと違って、〈脚をゆすぶり、にたりとした顔で腰かけ〉ている伝吉には、「世間の常識」というものが通じない様子である。そのような伝吉に対する世間のまなざしは、〈間が抜けて〉いる、〈よほどの度胸があるのか、阿呆なのか〉というものである。ここで初めてあらわれた世間の伝吉に対する評価は、後に妻となった稲の伝吉に対する見方を先取りするものでもある。川越の旦那から昔の女中の娘を紹介され、間もなく会える新嫁のことを想像しながら、〈体が熱くなる位、興奮し〉た気持ちで宿に向かう伝吉に対し、稲は気に入らなかつたらいつでも戻ってくると涙をためながら、風呂敷をこしらえる様子が描かれ、二人の結婚に対する心構えはまったく違うものとして描かれている。

都会人への強い憧憬をもっている稲は、花婿が粗野な山人<sup>やまびと</sup>であったことを嫌悪したばかりではない。自分を溺愛し、どういう事情があっても自分から離れ得ない相手であることを一眼で見抜くと、そういう伝吉を忽ち無意識に軽蔑し始めてもいたのである。

〈都会人への強い憧憬をもっている〉稲は、〈素朴な性格に生まれついた〉伝吉とは全く異なった性格の持ち主である。素早く利害の価値判断を下す稲の合理主義は、後の伝吉との結婚生活においてははっきりあらわれている<sup>13)</sup>。伝吉より優位であることに気が付いた稲は忽ち〈無意識〉に伝吉を軽蔑し始める。〈無意識〉に行われたこの動作は、稲の性格の形成をうかがわせるものでもある。男女共学のクラスで級長にもなっていた稲は、男性の同級生たちの不服の騒ぎの中、クラスで只一人横木渡りを成功させ、自分の地位を固める。尋常小学校を卒業した稲は、奉公人として町に出るが、お寺は梵妻が残りのものを食べさせると嫌い、金物屋でもおかみさんと争って続かなかったが、内務部長一家の〈文化的な生活〉に憧れ、今まで一年も続いたことのなかった奉公生活を珍しく三年近く続いていた。〈自分の気の向くことには、どこまでも一途〉な稲は、〈一日じゅう汗みずくになってたち働き、もらった給料は殆んど手もつけず、奉公先で知り合った東京の大学生のために使い果たす。しかし、主人一家は東京に戻ることになり、稲はその青年について行こうと心を決めたが、青年から〈君のような素朴〉な人は、〈都会へ放り出したら、すぐに垢がつ〉くと、同行することを拒否される。

テキストの前半には、都会に憧れている「都会型」の稲と〈素朴な性格に生まれついた「地方型」の伝吉が対照的に描かれている<sup>14)</sup>。結婚以前の稲と伝吉に表象された「都会」と「地方」の差異は、結婚後もそのまま保たされ、現前化する。ここで注意を払いたいのは伝吉の出自についての記述において、〈伝吉の母親は豊後の国の人里離れた山奥で、母一人子一人、炭を焼いて暮らしていた〉と、まず、父親不在の伝吉の家庭が示され、長作爺さんによる伝吉の母親の半生が語られている。〈父〉の不在は、伝吉における〈父〉の權威の欠如を意味しているものであり、また、稲との結婚生活の中で「家長」としての伝吉の役割の喪失を暗示するものとして提示されている。テキストの冒頭部分で語られた母親の生き方は、後の伝吉の妻となった稲の生活ぶりとは異なっているものであり、稲を描くための補助線として提示されている。伝吉が旅さきの旅館で新嫁を待っている場面から始まるこのテキストには、まず、結婚に至るまでの二人の過去が語られている。稲については小学校のエピソードや奉公先の出来事など、結婚直前までのことが詳しく書かれているのに対し、伝吉については主に母親の死後の生活だけが書かれていて、長作爺さんによる伝聞の形で伝吉の出自が伝えられているほか、幼い時期については殆んど書かれていない。十八歳までの伝吉の生活が空白として残され、その空白は〈父〉と〈母〉の問題を喚起するものとして存在している。このように稲と伝吉についての回想は、〈父〉と〈母〉にまつわる問題を内包しながら、その後の物語の展開に必要な不可欠なものとして提示されている。

## ②反転する夫婦の位相

〈国道に沿った古めかしい商人宿〉で新婚を迎えた稲は、〈にたりとした顔で見惚れてい〉る伝吉を初対面から軽蔑し始め、〈挑むような口調〉で伝吉が土地を持たず放浪することに不満を漏らす。山人の伝吉に対する世間の見方は、都会に憧れている稲によって顕著にあらわれていた。好きな人と一緒になれなかった自分の人生を嘆き、当てになるのはお金ばかりと、稲は鶏を飼い、蕎麦畑を作りながらひたすらお金をためることに工夫を凝らしている。そして山の持ち主から送られた給料を貯金す

るため、畑づくりの稲作をしようと伝吉に土地の開墾を頼む。お米ができれば自給自足で、月々送られてくる給料は貯金しようとする稲の心を知るはずのない伝吉は、稲に魚を食べさせようと、稲作の畑に池を作る。漸く池はできたものの、いきなり〈あんぼんたん〉と言い出す稲に伝吉は、〈魚はそのうち喰えるよう〉になると言い返す。稲にとって伝吉のそのような〈親切〉さは、〈忠義心〉もない〈忠義顔〉にすぎず、稲が言う〈肝心要目〉の〈道理〉とは、〈わが山だ、と思って働けば、どんな荒山だとして肥〉るものであって、〈山が肥〉るとそれはまたわが利益につながると言うことであった。しかしこの〈肝心要目〉の〈道理〉は、〈先のことばかり考えるのは、わしの性に合わないのじゃ〉と、伝吉によって否定されてしまう。思いつくまま行動する伝吉の「自給自足」の山の生活は、考えながら合理的に行動する稲の「近代的生産関係」とは無縁なものであった。

ここで注目しておきたいのは、山を開墾し稲作を試みる稲と伝吉の対立である。稲作に必要な水(川)があるところは、山の人にとっては魚をとる場所でもある<sup>15)</sup>。水を掘り上げ、池を作り、その中に魚を入れたのは山の人々の自然な発想でもあるが、里の生活をそのまま山に持ち込もうとする稲には、伝吉のそのような考えが〈あんぼんたん〉にしか見えないのである。伝吉の〈そのうち喰えるよう〉になる山の中の自然採集の生活に比べて、稲の言う稲作は〈先のこと〉も考える計画性を必要とする作業である。山の中で蕎麦畑を作り、稲作の土地を開墾しながら、里人の生活空間そのものを山の中に持ち込もうとする稲は、里人の世界の価値観をそのまま伝吉に植えつけようとする。〈先のことばかり考えるのは、わしの性に合わないのじゃ〉と、稲のいう〈肝心要目〉の〈道理〉に向かって発する伝吉の言葉は、里人の価値観に対する否定でもある。山の開墾をめぐるあらわれた伝吉と稲の対立は、山人の世界と里人の世界の価値観の対立を示すものでもある一方、合理的な近代的発想に対する違和感をあらわすものでもある。稲は〈鼻の頭に脂汗を浮かせ息を切らし〉ながら振る舞っているが、伝吉は〈命ぜられた杉苗の間引きには、いっこうに手をつけず〉、〈気持よさそうに昼寝〉をする。その伝吉に耐えられなかった稲は〈山に木霊<sup>こだま</sup>するほどの大声〉でわめきたてる。

〈魂のなか伝さんは、何もかもわしに任せきって気持ち楽じゃろ。伝さんにとってはわしが運命<sup>さだめ</sup>で、わが脚に噛りついてさえ居れば、それで、こん日さまがすんでゆく<sup>さ</sup>のじゃから結構なことじゃ。わしは、そうはゆかぬ。われとわが運命をつくって行かねば今日さまに相すまぬ。ほんに伝さんが羨しいことじゃ〉

稲は全てのことを自分に任せ、〈われとわが運命をつくって行く〉気を見せない伝吉を〈魂〉のない人間という。樵夫の伝吉が山師になったのは〈稲の言葉の影響〉で、空地の一隅で蕎麦畑を作ったのも〈稲の発案〉であって、米が自給自足で食べられ、貯金ができたのも稲の畑づくりの稲作のお陰である。仕事はいつも〈命ぜられ〉、〈監視〉の下で働くのが常である伝吉に、稲が言う〈伝さんにとってわしが運命<sup>さだめ</sup>〉という言葉は無理のないことであろう。伝吉を〈魂のな〉いという稲の言葉は、〈無関心な表情〉で、未練も喜びも知らない伝吉の人間としての主体性を完全に否定するものである。伝吉一家の金作りはすべて稲の思案で行われているもので、伝吉は家庭の経済を支えるはずの「家長」としての役割を失い、経済行為の主体として否定されている。妻である稲が夫の伝吉の〈運命〉となっているこの夫婦の関係において、夫の伝吉は「家長」として「失格」し、そのような伝吉夫婦のあり方は、世間の〈正し〉い夫婦関係と正反対の形で存在しているものである。



### ③〈父〉の表象

伝吉一家の経済的行為が稲の手によって営まれている中、伝吉の〈父〉としての地位を揺さぶる人物として登場するのが、人手不足で町から雇った若い青年の源やんであった。或る日伝吉が見つけた三つの雉の卵をめぐって〈三人は少時評議<sup>しばらく</sup>〉をしていたが、目先のことしか考えない伝吉はその卵を分けて食べようとする。しかし、稲は〈鶏に抱かして肉にして〉食べると言う源やんの提案に触発され、〈三つの卵を三十、三百にす〉るのが〈肝心要目なところ〉だと、〈血相を変えてどなりつけ〉る。三つの卵は二羽の雄の雉と一羽の雌の雉にかえていたが、二羽の雄に追われる雌をかわいそうと思った伝吉は、そのうち一羽の雄の雉を鶏の雌と一緒に入れ、交配させようとしたが失敗する。交配の失敗で雄の雉は期待されていた付加価値を持たせなくなる。稲は交配が成功しなかった原因を気の強かった雉の所為とし、伝吉を〈能〉のない雉にたとえる。ここで経済的価値は〈能〉を判断する尺度として認識され、〈能〉をもたない行為は人間の行為から排除された動物的行為として扱われている。雉をめぐるエピソードは、源やんを媒介に合理的に考えながら行動する稲と無〈能〉の伝吉の落差を際立たせ、伝吉を動物的本能しか持たないところまでおとしめている。

夏の暑い朝、芋畑へ出かける途中に岩の割目から蝮を見つけた伝吉は、鉤をあげ殺そうとしたが稲に止められる。伝吉と一緒に生活するうちに串ぎしの焼き蝮を食べるようになった稲であったが、伝吉の蝮を殺そうとする行動を止め、蝮に噛まれて奇形な子どもを産んだ利衛門の話を伝吉に聞かせながら、自分の妊娠を告げる。ここで稲の妊娠を知らせるものとして夏の蝮が登場し、物語は一つの転換を迎えることになる。稲の妊娠を知った伝吉は〈わが身もこうして、産れたんけ〉と、卒死した母親のことを思い出す。稲の妊娠によって思いだされているのは母親のことであり、それは、親のことを思い出しながら自ら親になることで親子（父子）の絆を確認しようとするものである。しかしその絆は花子が源やんの子であることによって途切れてしまう。麓の若者から花子が源やんの子であることを知った伝吉は、稲に向かって〈抗議〉するが、伝吉の〈精いっぱい〉の〈抗議〉とは、ただ〈泣き笑のような表情でつぶやく〉程度であった。花子が源やんの子供であるということは、伝吉が「実父」として「失格」であることを意味しており、伝吉は源やんによって〈父〉になる権利と権威を奪われているのである。この〈父〉の権威の喪失は伝吉の成長過程ともかかわっているものである。

〈母一人子一人〉と二人の生活をしていた伝吉は十八歳の時に母親を亡くすが、この母親は〈唐突に脳溢血〉で倒れ、伝吉の出自は母親の心の中に封じ込められたまま、あかされることはなかった。母親の死後、伝吉は隣の山の長作爺さんの提案で結婚するまで樵夫をしながら放浪生活を続けていたが、伝吉の出自と母親の半生の秘密はこの爺さんによって語られ、伝吉は生まれて以来聞いたことも見たこともない父親について初めて聞かせてもらう。世間と離れた山の中の生活で、〈他人の顔といえは数えるほどしか知らない〉伝吉にとって、〈父親というものの概念〉は、〈いっこうにつかめな〉いものであった。伝吉の父親が営林区署の役人であること、そして短剣を腰につるした〈色白な美男〉であることが長作爺さんによって語られているが、伝吉がつかめなかったのは単なる父親の職業や外貌に関する情報だけではあるまい。社会的規範としての〈父〉のあり方が、この〈概念〉という文字によって導き出されている。生まれながら母親と二人の生活に慣れ切った伝吉は、〈父〉という〈概念〉が内包している権威を知らないまま、大人の世界に入る。十八歳で母親を亡くしたという年齢設定は、〈父〉不在の環境の中で大人になった伝吉の成長過程を強調する重要な手がかりとしてと

らえられる。稲との結婚生活の中で〈父〉になることを拒否され、〈父〉の権威を喪失したことは既に述べた通りであるが、このような〈父〉の権威の喪失は、伝吉の成長過程においての〈父〉の欠落と結び付けられ、テキスト全篇にわたって〈父〉の不在が示されている。そのような意味で〈父〉が多く語られなかったのは必然的なものであり、伝吉は〈父〉（支配）の子ではなく〈母〉（従属）の子として存在するのである。それは稲との結婚生活の中で「家長」の役割の喪失という形で顕在化していたのであった。

翌日は晴れた暖い日であった。／前夜なにごともしなかったもののように、伝吉と稲とは、肩をならべて、蕎麦畑の除草をしていた。／（中略）〈なにほどの土地も、われらまだ耕していないではなかか。間がな隙がな、伝さんは休みたがりなさる。これでは土龍<sup>もぐら</sup>どんにも申しわけがなか。掘って掘って畑の土を掘りくり返して、来年は今年の倍の花を咲かせんことには〉／草の上に寝ている花子に、伝吉は親愛な気もちでにたにた笑いかけると、自分もその傍らに腰をおろし、腰の煙草入れから煙管をとりだした。／〈来年のことは来年でよかる。／お前のように先のことばかり考えるのは、わしの性に合わんのじゃ。／わしが母<sup>かか</sup>さんは、炭を焼いているさ中に、ぼっくり死んなさった。土龍どんもぼっくり、お前もぼっくり、わしもぼっくり、そのうち死ぬじゃろ〉／林の梢にけたたましい山猿の声がすると、うそやくわたたきが一斉に、賑かな羽搏きをして、林からとびたつた。

一緒に仕事に出かけた稲は〈なにほどの土地も、われらまだ耕していないではなかか〉と、手を休める伝吉に文句を言う。文句は言うものの、いつもと変わりなく背伸びをし、欠伸をしながら仕事をする伝吉に対して、稲は初めて〈われら〉という言葉を発する。〈伝吉一人を残して下山するのに耐え得なかった、という稲の気もちに偽りはなかった〉という伝吉に対する稲の変化が、結末の稲の〈われら〉という言葉によって再確認されている。〈土龍どんにも申しわけ〉がないように働き、〈来年は今年の倍の花を咲かせんことには〉と言う稲に伝吉は、〈来年のことは来年でよかる。／お前のように先のことばかり考えるのは、わしの性に合わんのじゃ。〉と言い返す。視力が退化し、鼻の触覚で獲物を確保する土龍は一日食物を食べなかったら餓死してしまうということから〈大食漢〉と呼ばれることもあるが、そのような土龍を稲に言わせることに、皮肉めいた批評さえ感じる。〈土龍どんもぼっくり、お前もぼっくり、わしもぼっくり、そのうち死ぬじゃろ〉という伝吉の言葉は、頹廢的な生き方に見えられがちであるが、人間の最も根本的な問題とも言われる生と死に触れている伝吉を描くことに、〈渡り鳥が山の梢から梢へと、旅して歩くような無雑作な感情〉で山を渡っていた伝吉を認めようとするのではないか。渡り鳥は冬になると暖かいところを求めて北から南へと旅立つ。自然の流れに沿って、冬の日向におとずれ、〈朝陽がキラキラ当たてい〉る山の中で囀るうそとくわたたきは、明らかに伝吉の言葉を象徴するものとして描かれている。〈来年のことは来年でよかる〉と。

花子が源やんの子であるという告げが、伝吉にとって〈火の気のない囲炉裏ばた〉で迎えた冬の季節のように厳しいもので、衝撃を与えるものであったのは間違いのないことであろう。しかし、その事実を告げられた翌日、伝吉は〈晴れた暖い日〉に迎えられ、〈親愛な気もちでにたにた〉と、草の上に寝ている花子に向かって笑いかける。このように「土龍とんもぼっくり」の結末には、〈われ

ら」と伝吉に呼び掛ける稲と、花子に〈親愛な気もち〉を表す伝吉の姿が、人間の温もりを感じさせるものとして描き出されている。そしてこの冬の季節は伝吉の一家の春への出発を連想される風景として書かれているのである。

テキストの冒頭には、〈薄ら寒げな茜<sup>あかね</sup>の色〉が残っている山際、〈深い夕闇〉の中に包まれている夜の山の景色が描かれているが、結末においては〈朝陽がキラキラ当っている〉山の朝の景色が描かれ、物語は明るい余韻を残しながら結末を迎えている。結末には伝吉夫婦の物語とともに季節の風景が鮮やかに描かれ、自然との調和の中で生活を営んでいく人間の姿が描かれている。

#### ④〈母〉の背理

一節で確認したように伝吉の出自においてまず語られているのは伝吉の母親のことである。冒頭で伝吉の母親を語ることから始まるこのテキストは、結末において再び母親の死に触れながら終わっている。〈母〉の存在はこの物語の構成上重要なポイントとして書き込まれている。〈こんげな〉〈妙な匂い〉で、伝吉のところに訪ねてきたのが隣の山の長作爺さんであるが、この爺さんによって母親の秘密な半生が語られる。爺さんは〈たったひと晩〉の関係で妊娠し、その後の半生を一人で過ごした伝吉の母親を〈ほんに操<sup>みさお</sup>の正しか女〉と、自分の話に興奮しながら語っている。テキストでは〈人間の生き死、自然の運行にまるで諦観的なやまびと独特な言い方〉をする長作爺さんに「世間」という目を与え、伝吉の母親の半生を〈正し〉いものと評価しているものの、この「世間」というものは〈やまびと独特〉の「世間」である。母親の〈正し〉さは、後に稲を語る一つの補助線として提示されている。次に〈母〉が登場するのは稲の妊娠によるものである。

稲の妊娠を知った伝吉は〈わが身もこうして、産れたんけ〉と卒死した母親のことを思い出す。ここで〈母〉は〈母一人子一人〉の枠を逸脱し、伝吉一家と結び付いている存在としてあらわれている。稲の妊娠に〈母〉がよみがえったのは、伝吉の母親の妊娠と稲の妊娠がきわめて似ているからである。二人とも〈私生児〉の母親であることは厳然たる事実であるが、伝吉の母親の半生に世間は〈正し〉いという評価を与えているものの、不倫が発覚した稲は、自分の噂をする世間に〈あんぼんたん〉〈悪知恵〉という言葉を持って抗議する。〈母〉に対する「世間」の〈正し〉いという評価、それに対して伝吉に向かってひたすら自らの哀れな立場を強調しようとする稲、〈母〉と稲の二人の人物についての描き方には明らかに差異が存在する。伝吉の母親は営林区署の役人と〈たったひと晩〉の妊娠で、稲の相手は雇われた手伝いの若い青年であるが、相手との関係において二人の立場はまったく異なるものである。前者の〈役人〉と〈やまびと〉という関係（支配服従）が、後者においては完全に覆されている。相手との関係において雇主である稲が、〈やまびと〉の（従属）伝吉の母親の立場より優位であることは確かなことである。しかしテキストでは稲の相手を、自分より十五も年上の桜湯のおかみさんと不倫の経験をもち、不倫の〈悪評の責任〉は女に負わせ、周りからは〈上方帰り〉ということで〈よかにせ〉と呼ばれたと描き、伝吉の父親については短剣を腰につるした〈色白な美男〉と描いている。このような二人の相手に優劣をつける描き方は、稲の優位性を否定するものである。この優位性への否定は夫婦関係においてもあらわれている問題である。

伝吉夫婦において、伝吉は「家長」としての権威を失い、妻である稲が「家長」の代理人として描かれている。夫婦の〈正し〉い関係（支配と服従）が、この伝吉夫婦の関係によって完全に転覆されている。このテキストで〈母〉はいわゆる〈正し〉さという問題を問いかける存在でもあり、その〈正し〉さのため〈母〉は〈喜びを知らない〉まま、犠牲にしなければならなかった。伝吉の出自を

語る時まず伝吉の母親の死が語られ、〈伝吉の母親は〉と、その語られる対象が伝吉でも、父親でもないこの〈母〉であったことに意味があり、〈母〉を語ることがまた〈父〉へと結び付いていくのである。長作爺さんによって〈母〉の〈正し〉さが語られ、その〈正し〉さを語ることによって、〈正し〉さの背後に存在する〈父〉の権威が語られている。このようにテキストでは直接〈父〉の権威に触れることが避けられ、〈父〉は表象として語られている。

〈母〉の〈正し〉さは、稲の優位性を否定するものでもあり、その〈母〉の〈正し〉い行為によって成立したいわゆるあるべき〈夫（支配）婦（服従）〉の関係が、伝吉の夫婦関係によって否定されている。しかし、この伝吉夫婦においての稲の優越性も〈母〉の死を語る伝吉の言葉によって否定されているのである。〈正し〉さとは何かという問題を喚起するものとして〈母〉が存在し、テキストの結末において再び〈母〉が語られ、〈母〉の存在はこのテキストの全篇にかかわっているのである。

〈母〉の半生は、〈諦観的なやまびとと独特な言い方〉をする長作爺さんによって〈正し〉いものとして語られているが、この〈独特〉な〈やまびと〉の倫理観は、近代的倫理を逸脱したものとして描かれ、〈やまびと〉の世界は、近代的都市空間と対置しながら存在している。源やんの子である花子に伝吉は決して憎むことなく〈親愛な気もち〉で笑いかけが、花子の生まれは伝吉の出自の物語を反復するものである。近代家族形成が近代国民国家の形成において一つの戦略として用いられるとしたならば、伝吉の家庭の系譜というのは近代家族関係とは対照的なものであり、いわゆる「正統性」をもたないものである。〈父〉の権威を喪失し、〈父〉不在の伝吉一家のあり方は、日本の近代化の中であえられた家族国家観に表象される〈父〉の権威に相反する存在で、その「正統性」のゆらぎは万世一系の「正統性」を問い直すものでもある。

### おわりに

「土龍どんもぼっくり」が発表された二ヶ月後、日中戦争が全面的に勃発し、国内情勢は一気に緊張感を増している。そのような緊張感が漂う直前に作り出された伝吉という人物造形は、「都会」（政治）から離れた「南方」的風土の中でのみ可能ではなかったのではないか。テキストの最後には〈来年は今年の花を咲かせようとする稲と、〈来年のことは来年でよかる〉とする伝吉の言葉が対照的に描かれ、山人の世界と里人の世界の対立が再び強調されている。土龍のようにひたすら掘って掘って〈来年は今年の花を咲かせようとする稲、そして〈土龍どんもぼっくり〉と稲を否定する伝吉、稲に対する伝吉の否定は、まさに進歩的、近代的合理主義への批判でもあり、そういう理念とかけ離れたところで営まれている庶民たちの〈今〉を生きる生活ぶりをうかがわせるものでもある。昭和十二年という時期に〈今〉を懸命に生きるしかなかった民衆へのまなざしを中村地平は、近代都市風景と無縁な「南方」の〈鉄道沿線の小さな部落へ出るのにも少二時間はかかる深山〉という「場」を舞台とし、伝吉夫婦の葛藤を通じて示していたのである。中村地平は、山の中に生活基盤がおかれている伝吉の住む〈やまびと〉の世界が、近代国家体制に組み込まれていることを認識しながら、あえて「南方」の風景の中に近代化とかけ離れたような空間を作り上げ、都市と農耕社会、さらに〈やまびと〉の世界の差異に着目しつつ、近代主義へのアンチテーゼを果たしているのである。

このような「土龍どんもぼっくり」に見られる「場」と「時」への問いかけと、近代的進歩主義へのアンチテーゼは、1937年12月に単行本として発行された『旅さきにて』に通底するものである。「土龍どんもぼっくり」と一緒にこの単行本に収められている「旅さきにて」は、「僕」の旅の物語で

もあり、お俊さんのあの世への「旅」の物語でもある。お俊さんはマラリヤの熱病という「自然災害」に命を落としたものの、お俊さんが台湾に渡ったのは「海外雄飛」の先駆者の夫について行ったものである。〈紫陽花ならぬ仏僧華〉—日本を思わせる紫陽花、そして中国の仏僧華、「旅さきにて」の最後のこの一句は、まさに日本と中国（台湾）—「故郷」と「異郷」の二つの「場」を連想させるものでもあり、お俊さんが異郷でこの世と別れを告げなければならなかったことへの問いかけでもある。お俊さんの「あの世への旅」、「僕」の死者への記憶に問われているのは、まさに「旅さきにて」の題目に内包されている二つの側面—旅先での「できごと」と、そしてその「場」を想起させるものである。〈桜ならぬ仏僧華〉、ここで日本の象徴としてあえて紫陽花を用い、お俊さんの死に紫陽花を弔花としていたのは、桜に憧れ、美しいまま散ってゆく桜に象徴される英霊との差異を示すものでもある。

中村地平が初めて台湾に渡ったのは、台北高等学校に入学するための1926年のことであるが、この「旅さきにて」が書かれたのは、台湾から戻ってきた4年後の1934年のことである。中村地平が台湾から日本に戻ったのは東京帝国大学に合格した1930年のことであるが、その年の10月に台湾では、女性や子供を含む日本人が命を失う「霧社事件」が起き、その事件の発生後、日本側の弾圧により台湾でも多くの犠牲者が出た。後に中村地平はこの事件を扱った小説「霧の蕃社」（『文学界』1939.2）を発表するが、「旅さきにて」のお俊さんの死、そして「内地」の「南方」への「僕」の憧れは、そういった時代の流れと無縁に書かれているものではないだろう。

「旅さきにて」には、「南方」の表象として初夏の爽やかな「内地」の田園風景が描かれている一方、後半には晩秋の薄暗い植民地台湾が対照的に描かれている。「内地」の生活に浪漫を感じていたお俊さんの植民地台湾でのあの世への「旅」は、生命力を感じさせる「内地」の田園風景への憧れと異質な「外地」の都市空間に対する否定を際立たせるものである。「内地」の美しさは、悲惨な「外地」の風景の否定により強調されているものであり、「美的内地」が「悲惨な外地」によってささえられているというのが、当時の中村地平の認識ではなかっただろうか。「美的内地」と「悲惨な外地」—中村地平の「内地」と「外地」へのまなざしが、この二項対立の図式によって描かれている。「土龍どんもぼっくり」において長作爺さんによって語られた〈独特〉な〈やまびと〉の世界つまり伝吉が住む世界は、一つの内なる異境として描かれ、謂わば「内地」の中の「外地」として浮かび上がっている。すでに述べたように「土龍どんもぼっくり」は、山の明るい景色を背景としながら、伝吉夫婦の生活の中で、「都会」と「地方」、「文明」と「野蛮」といった二項対立の問題を内包しながら、〈父〉の不在を通じて〈正し〉さとは何かという問題を問いかけている。「土龍どんもぼっくり」に描かれた進歩的、合理的なものへの否定による〈正し〉さへの問いかけは、「旅さきにて」のお俊さんの死への問いかけと重なる問題でもある。お俊さんが台湾に渡ったのは〈海外雄飛〉の夢を追う夫について行ったものである。アジア解放と進歩主義を掲げた〈海外雄飛〉の背後には、「内地」の行き詰まりという「内地」の現実が隠されている。『旅さきにて』の両作品において中村地平の「外地」から「内地」へ、さらに「内地」の南への視点の動きは、近代的進歩主義への違和感を内包するものであり、一方は悲劇的に、一方は喜劇的に描かれているのは、まさに近代進歩主義、拡張主義へのアンチテーゼと基盤を同じくするものでもある。『旅さきにて』には、「外地」と「内地」の対比によってあらわれた近代的進歩主義へのアンチテーゼが、「内地」が内包する問題と重ね合わせられてあらわれているのである。

- 1) 河原功「中村地平・その作品と周辺」、『成蹊国文』14号、1980. 12、74頁。
- 2) 岡林稔『《南方文学》その光と影』、鉾脈社、2002. 2、60頁。
- 3) 浅見淵『中村地平全集』解説、皆美社、1971.2、482頁。
- 4) 復刻版『台湾大年表』台湾経世新報社編、緑蔭書房、1992. 3、82頁。
- 5) 注4に同じ、62頁。
- 6) 『領台初期の台湾社会—台湾総督府文書が語る原像（Ⅱ）—』中京大学社会科学研究所台湾史料研究会編、創泉堂出版、2008. 3、509～516頁。
- 7) 藤井康子「1920年代台湾における地方有力者の政治参加の一形態—嘉義街における日台人の協力関係に着目して—」『日本台湾学会報』9、2007. 5、49～56頁。
- 8) 〈車にいる僕の頭と摺れ摺れに、大きな蛾虫に似た蝙蝠が幾匹も飛び交うていた。そして空に点在している焼け爛れたような星の光りをその羽搏きで明滅させていた。劇院から聞える銅鑼や笛の音が背にだんだん遠のいて行った。〉これは、「僕」がお俊さんと別れる時の場面での描写である。中国では蝙蝠の「蝠」の字が「福」に通じることから幸福を招く縁起物とされる。テキストの終わりの部分に描かれた蝙蝠には、〈これから又続く〈土人〉町の孤独の生活を送るだろうと思われるお俊さんの幸福を願う「僕」の気持ちをあらわすものでもあるだろう。また、蝙蝠は百年以上生きたネズミが蝙蝠になるという伝説もあり、長寿の象徴ともされている。しかし、その象徴とは反対にお俊さんと別れた半年後、「僕」はお俊さんの夫から彼女の死を知らせてもらう。芥川の「江南遊記」には「何、蝠と福とは同音ですから、支那人は蝙蝠を喜ぶものです。」と蝙蝠にふれ、また江戸時代の日本人の見方についても言及している。台湾に4年間住んでいた中村は、蝙蝠にまつわる中国人の風習を知っていたと考えられる。
- 9) 後藤乾一『近代日本と東南アジア』岩波書店、1995、79～82頁。
- 10) 後藤乾一「台湾と南洋」『近代日本と植民地』2、岩波書店、1992、159頁。台湾が再び「南進拠点」として再登場しているのは「領台四〇年」が宣伝された1935年のことである。1935年前後を大きな転換として、出版物の内容には著しい変化が見られ、「それ以前の『南洋に於ける邦人の企業』（一九一七年）の系譜に立つ地味な実態調査的なものから、『南洋に対する日本の経済的進出』（一九三五年）に代表されるように日本の南進を強調した刊行物がふえてくる。それと同時に第三期になると、台湾における“南進ムード”の高揚を反映し、『台湾と南支南洋』（一九三五年）、『台湾と南支那』（一九三七年）といった南進の拠点としての台湾を改めて前面に押し出す視点が強まって」きた。
- 11) 木村健二「在外居留民の社会活動」『近代日本と植民地』5、岩波書店、1993、35頁。
- 12) 注11)に同じ。39頁。
- 13) 注2に同じ、94頁、なお、合理的なものについては、岡林氏は源やんについて「合理的センスを身につけた青年である」と指摘している。
- 14) 注2)に同じ、95頁。
- 15) 山内節『山里の釣りから』岩波書店、1995、24～25頁。

「旅さきにて」、「土龍どんもぼっくり」の本文の引用は『中村地平全集』（皆美社1971）に拠った。

## The symbols of the “outland” and the “inland” by Nakamura Chihei — Focusing on “During My Trip” and “The Mole Dropped Dead” —

SHEN Fuzhen

Discussion on Chihei Nakamura cannot exclude the relation with ‘the south’. Before “During my trip,” his longing for the south mainly had a strong tendency of the exoticism. However, “During my trip” portraying the trips to the colony Taiwan and Kyushu, showed signs of admiration for ‘the south’ of ‘the inland’, and ‘the south’ symbolized more than exoticism. By looking at the both works of “During my trip” which tells the unfortunate story of Otoshi-san he met on his trip, and “The mole dropped dead” which has the tendency of ‘southern literature’, this study discusses ‘the south’ as a symbol, tracing Nakamura Chihei’s viewpoint from ‘the outland’ to ‘the inland’ and then to ‘the south’ of ‘the inland.’